

■活動レポート

第61回企画展関連事業

「野生動物と生きる ～岩手のシカとクマ～」展を終えて



愛称シカクマ展

岩手では身近な存在である本州最大の野生動物ニホンジカとツキノワグマ。人とのあつれきが社会問題となっている彼らに焦点を当てた展示は、皆さんに親んでもらえたようです。それを裏付けるように、平成21年10月3日～12月6日の会期中6千4百余名の方が訪れ、アンケートでは満足・やや満足と答えた方が約98%という結果でした。

親しみ度No.1は、シカのピー太物語と一生分の角でした。死に際に飼い主の枕元に立ったピー太とその角を大切に保存した飼い主の話に感銘を受けました。



その他に、企画展で印象に残った資料としてアンケートで多く挙げられたのは、ニホンオオカミの剥製と触れるツキノワグマの毛皮でした。岩手県産オオカミは、マスコミに注目され運搬から展示まで気を遣いました。貴重な展示資料の監視は博物館友の会の方々にボランティアでやっていただきました。

また、限られた宣伝予算の中で、広報活動をしたわけですが、半数以上の方が何らかの広報を見聞きして来てくださいました。そして、何より口コミで来てくださった方が約10%ありました。様々な方に支えられて、今回の企画展を閉幕することができたことを感謝いたします。



満員御礼の文化講演会と秋期セミナー



三浦慎悟氏（早稲田大学人間科学学術院教授）の文化講演会は、圧巻でした。開場前から席がどんどん埋まり、講演中も来場者が途切れませんでした。そのため、臨時席の増設や資料の増刷をしたのですが、行き届かない点もあり、ご迷惑をお掛けしました。講演は、同氏の親しみ深い人柄が表れ、海外の事例を含む多くのデータに裏打ちされたものでした。岩手のシカ・クマと人間との共存のヒントになったのではないのでしょうか。

秋期セミナーは、野生動物カメラマンの横田博氏を皮切りに始まり、日光に生きるツキノワグマの生態を中心に肉薄する映像で聴衆を魅了しました。

第2回のセミナーでは、岩手県環境保健研究センターの山内貴義氏から、わかりやすいクマとシカの話と岩手での保護管理の現状に触れていただきました。

第3回のセミナーでは、佐藤嘉宏氏（一関市立巖美小学校副校長）が、貴重な映像で岩手の嫌われる動物クマとシカの生態をわかりやすく紹介してくれました。

最後のセミナーは、岡恵介氏（東北文

化学園大学教授）が北上山地の人々の暮らしと野生動物の利用と題して、古文書や聞き取り調査の結果を交えて話をされました。

夕暮れのシカウォッチング

10月18日（日）、秋期セミナーでもお世話になった佐藤嘉宏氏を講師に迎え、第58回自然観察会が行われました。

当日は雨の予報でしたが、観察場所の五葉山県立自然公園大窪山周辺だけ見事に晴れました。心浮き立つ参加者をよそに、事前に下見をした講師から、すでに誰かが入山し、シカが森の中に隠れているため観察できるシカが少ないという一報が入り、胸中穏やかではなくなりました。

しかし、そこは講師の庭のような大窪山ですから、的確な案内のもとに繁殖期のシカウォッチングをすることができま



した。講師は、遙か彼方の草地でウシと混在するシカの群れの中から、あの雄がNO.1、などと説明してくれました。

フタトゲチマダニの被害にあうこともなく夕暮れをむかえ、帰路につきました。その時、森の中から、ぞろぞろ親子シカが出て来るではありませんか！今まで望遠鏡のレンズを通して見ていた彼らが、息づかいが聞こえるぐらいの所にいるのです。動物園では味わえない野生の距離で、お互いに見つめ合いながら、別れを告げました。



（主任専門学芸調査員 藤井千春）